

大久野島の軍事史

大久野島は、かつては小さな漁業と農業のコミュニティでしたが、20 世紀前半にわが国の軍隊によって変貌を遂げました。この島は、地域の紛争が激化する時期に戦略的重要性を持ち、それは島の景観と歴史に永続的な影響を残しています。

戦略的沿岸防衛

島の軍事施設は 1902 年に最初に建てられ、その背景には東アジアにおける領土的野心を巡る日本とロシアの間の緊張の高まりがありました。戦争勃発を想定し、政府は瀬戸内海の沿岸防衛網の一環として、大久野島に 3 基の砲台を建設しました。これらの施設は、敵艦が広島と呉の軍港を脅かすことを防ぐために設置されました。ロシアのバルチック艦隊が対馬海峡で敗北し日露戦争（1904 年-1905 年）が終結したため、この攻撃は現実のものとはなりません。砲台は 1924 年に解体されました。

化学兵器施設

1929 年から 1944 年の間、大日本帝国陸軍は秘密裏に化学兵器を製造するためにこの島を使用し、これらの化学兵器は日中戦争（1937 年-1945 年）で使用されました。大久野島の数少ない住民は退去を命じられ、島は公式地図から削除されました。戦争終結ま

で、陸軍は大久野島で推定 6,500 トンの毒ガスを製造しました。

米軍による徴用

第二次世界大戦での日本の降伏後、連合国軍は大久野島を接收し、化学兵器の備蓄を焼却、埋設、海洋投棄により処分しました。1951 年から 1956 年まで、大久野島は米軍によって弾薬庫として再利用されました。朝鮮戦争（1950 年-1953 年）で使用するため、島には砲弾や爆弾が保管されていました。